

2011年7月9日（土）マレビト・ライブ vol.3

「N市民 緑下家の物語」③

関係の境目を持続しようと虹見江波から提案された緑下稲光は、週に一度の虹見との交際を続けていた。提案通り、最初の夜以来、虹見との性的関係は留保されていた。その夜のことも本当にあったことなのか不明で、そのことは虹見との対話のなかで話題にあがらないままに稲光の記憶からも消えつつあった。

そのようにして稲光の現実感覚は次第に曖昧なものとなった。このN市の現実より、昨晚見た夢の記憶のほうが彼の意識を支配しているようでもあった。それゆえに、虹見との対話は、現実と夢の境目を明確にする上で大切なひとときであった。

稲光は、虹見の大学時代の先輩と称する男、月牛実（つきうしみのる）と出会う。ユング派の心理学者でもある月牛は稲光のまわりの夢の反乱の原因を身近な人物の無意識的な夢の産み出しであると告げる。そんなアホなと稲光はあざ笑いながらも、姉のユミの存在を思いうかべてしまっているのがあった。

そんなとき、久々に稲光のなかに現れた次男が「陽が死ぬ」という予言を稲光に告げる。まさに、緑下陽は窮地に追い込まれていた。ボスはN市長の殺害を決行するが、それは未遂に終わり、陽はその市長殺害計画の実行犯として警察に自首するようにとボスから身代わりを命じられたのであった。それを、あっさり拒否した陽は、計画の密告をおそれたボスの組織から追われることになる。

そんなある日（2011年7月9日）稲光は虹見との対話のなかで、自分たちが花婿と花嫁になって互いの親族たちと記念写真を写している夢を見たと告げる。それが「まさ夢」かどうかを確かめようと二人は稲光の夢の記憶を頼りに街をさまようのであった。そこに血相をかえた陽が現れる。